**2022年11月18日開催　住吉区地域自立支援協議会研修会報告**

この度「ヤングケアラー研修」で桃山学院大学・社会学部・ソーシャルデザイン学科の金澤ますみ先生に講師としてお越しいただきました。コロナ第8波も目前に迫っている中会場にお越しいただいた事ありがたく思います。今回の研修には32名の参加がありヤングケアラーへの関心度が非常に高いことが伺えました。

始めに協議会古田委員長の挨拶では、「未だに障がい者の支援は家族がしないといけないという認識がある（挨拶より一部抜粋）」との話から、世間ではいまだに支援の大部分は家族がしなければならないという認識があり、その結果「ヤングケアラー」を生み出してしまっているのではないかという言及もありました。金澤先生自身も、高校生時代に家族が事故に見舞われ、家族の支援をすることが多くあり、当時は「ヤングケアラー」という意識は全くなかったようですが、大学の先生にふと自分の状況を話し、「自分ももしかしてヤングケアラーなのかも」と思ったそうです。

ヤングケアラーの定義は「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」と仮には設定されています。ただ「直接介護」がなくてもヤングケアラーになりうるという視点が重要だそうです。例えば親の代わりに兄弟の世話をする、家計を支えるためにアルバイトをして家族を助けるなど、間接的ではありますがヤングケアラーにあたるそうです。

ヤングケアラーの予防的支援の一つとして「学校」がキーポイントになるのではないかと金澤先生は考えておられ、学校には児童生徒の遅刻・欠席・不登校など問題とされる行動をスクールソーシャルワーク（以下SSW）の視点でアセスメントを取りその背景にある児童虐待やネグレクト、貧困や今回の主題でもある”ヤングケアラー“に気付けることができる場所でもあるようです。学校からSSWに寄せられる相談事例には「家庭訪問しても全く会えない」「急に部活を辞めたいと言ってきた」「虫歯が多い」や「アルバイト中心で学校に来られない」「家族の介護と家事を担っていて学業が優先できない」などの相談が寄せられる、そういった相談からヤングケアラーを発見する事もあるようです。令和3年度に実施した府立高校のヤングケアラー実態調査では2万人のうち、1312人（6.5％）が「世話をしている家族がいる」と回答されたようです。その1312人の中でも「相談したことがないと答えた方は52.6％」おり、半数は一人で抱え込んでいる状況にあり、そして家族等のケアをしている生徒の方が欠席や遅刻が多く、宿題や提出物が滞りがちなど、学校生活に支障が生じており、また悩みや困り事を相談できずにいる生徒が多いのも実態調査では明らかになりました。アンケートでは、「世話をしている家族がいる生徒」が望んでいる支援として45％が「福祉サービスの支援」と答えています。どんな福祉サービスが使えるのか、そもそも福祉サービスについての情報を知らないといった事など幅広くあります。また今後の自分についての不安な部分を相談したいなどもあるようです。

イギリスの「ヤングケアラーが学校に望むことトップ10」というものの中には「ケアラーとしての責任が学校生活に影響していることを認識してほしい」「遅刻した時に機械的に罰しないでほしい」「柔軟に対応してほしい」などの切実な思いがあります。イギリスだけではなく日本でも同じような思いを抱きながら学校生活を送っている生徒もいると思います。理解ある対応や、ヤングケアラーの為の居場所や制度が充実できるよう考えていきたいと思います。金澤先生、貴重なお話をしてくださいましてありがとうございました。

以下参考資料

<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/2364/00404741/sswtoha.pdf>（スクールソーシャルワークとは）

<https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/2364/00404741/yckekka04.pdf>　（ヤングケアラー実態調査）

<https://www.pref.osaka.lg.jp/kotogakko/seishi/r03ycchousa.html>　（ヤングケアラーについて）